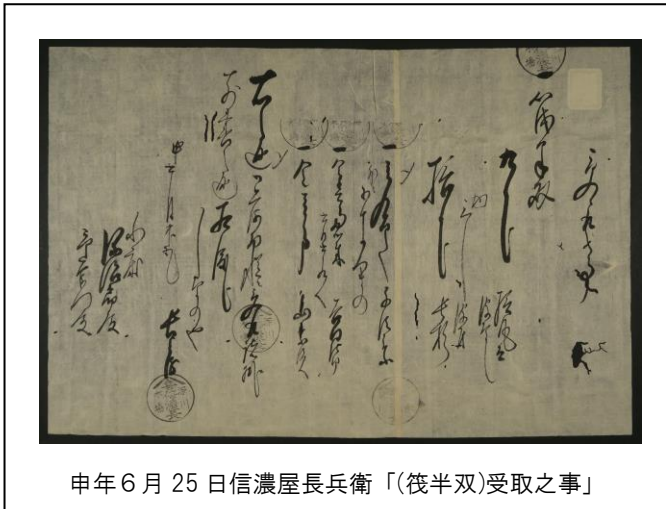




上井上村月吉家の材木取引 - 筏の受領書 -

飯能市立博物館 学芸職員 尾崎 泰弘

上井上村の小字坂(坂組)にあって、年番名主を務めていた屋号「月吉」の大野家。そこに残されていた古文書から、江戸時代の同家の材木取引の一端を見ることができます。

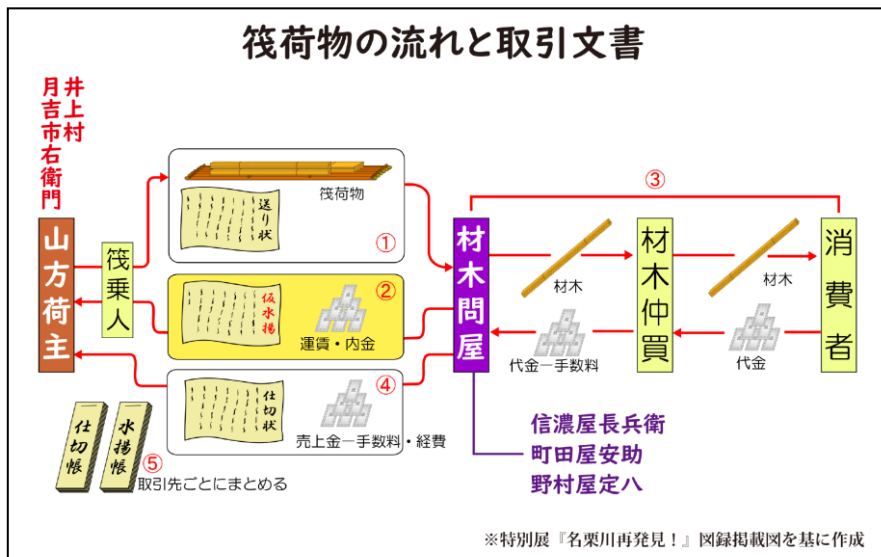


申年 6 月 25 日 信濃屋長兵衛 「(筏半双)受取之事」

その古文書とは、筏を江戸に送る際、間違いなく筏荷を受け取ったことを材木問屋が荷主に報告した「仮水揚」と呼ばれるもので、多くが(月吉)市右衛門宛に出されています。最も多いのは、深川の三十三間堂前にあった信濃屋長兵衛で 34 点あります。その他、深川久永町(現江東区平野四丁目)の野村屋定八、同じく木場の町田屋安助、中藤下郷の山林地主で八丁堀付近(現中央区)に出店を持っていたと推定される種木屋(佐野)啓次郎などからのものが確認できます。

これらの店はいずれも江戸の材木問屋組合の 1 つ、川辺壺番組古問屋組合に属していました。江戸には材木問屋組合が 3 つあり、深川木場材木問屋と板材木問屋・熊野問屋組合が主に「下り荷」(公用材)を扱っていたのに対し、川辺問屋は江戸周

辺に位置する関東山地から切り出された材木や炭、薪などの「地廻り荷」(民間材)を扱っていました。この送り状には干支のみで年号が記されていませんが、最も多い仮水揚が残る信濃屋長兵衛は、少なくとも文化 7(1810)年には材木問屋として名が現れ、嘉永 5(1852)年に庄兵衛と改名(代替わりか)していることから、月吉市右衛門が盛んに材木を江戸に送っていたのは江戸時代後期(1800 年代前半)であることがわかります。



また町田屋安助店は、上名栗村の名主を代々勤める一方で炭・材木商売を手広く行う、西川地方を代表する山村豪農である町田家(屋号「新館」)が江戸に出した材木問屋のうちの 1 軒です。安助は文政 11(1828)年に江戸に進出しますが、天保 9(1838)年に父栄次郎の死に伴い上名栗村に戻って名主を継いでいます。

井上は現在、市内における西川林業の拠点のひとつともいえるところですが、江戸時代後期においても材木生産が盛んに行われていたところだったのです。

【参考文献】

島田錦蔵『江戸東京材木問屋組合正史』昭和 51(1976)年 10 月

丸山美季「近世西川地方における山方荷主町田家の材木問屋経営」(『学習院大学人文科学論集 5』平成 8(1996)年)